

優秀賞

自分革命

秋田県大仙市立太田中学校

3年 佐々木 佑季音

歌うことが好き。英語を話したり、勉強したりすることが好き。口にするのは簡単なことのように思えて、実はとても怖い。

中学校生活の半分か過ぎ、受験を意識し始めるころ、進路希望調査のプリントが配られた。そのプリントには希望する高校だけではなく、希望する職業を書く欄がある。私はその欄に、決まって「地方公務員」と書く。理由を聞かれると「安定した職業だから。」そう答える。いつからだろうか。自分のやりたいことが言えなくなったのは。

小学生のころ、将来の夢は？ と聞かれると「歌手になりたい」そう答えている時期があった。私は小さいころから歌が大好きだった。歌はうれしいときも、つらいときもいつでも私に寄り添ってくれる。そんな歌をつくったり、歌ったりしている人が私の憧れで、そうなるのが夢だった。しかし、年を重ねるにつれてそんな夢かなわないのではないかと思うようになった。確かに歌を歌うのは楽しいし、「上手だね」と褒めてくれる人もたくさんいた。でも自分よりうまい人はたくさんいて、そんなことは最初からわかっていたのに、急に自分が恥ずかしくなった。

それから私は、将来の夢を「地方公務員」と言うようになった。はじめは「安定していて、ある程度の稼ぎがあるだろうから」と本心から思っているつもりだった。でも本当はただ怖かったのだ。自分の夢を語るのが、夢をばかにされるのが。だから逃げていた。本当の自分の気持ちから。そんなとき、校長先生が私の「地方公務員」という夢を聞いて「夢も希望もないなあ」と言った。そのとき私は何も言えなかった。凶星だった。確かにそれは夢というより、この仕事に就けば、安定して生きていけるだろうという、自分の中の現実的で安全な道だった。そこに夢も希望もあるわけなかった。

中学校に入って本格的な英語の授業が始まった。小学校の難易度とは比べ物にならないほど難しくなった。でも、それは私にとってとても楽しいものだった。正しく発音できると嬉しくて、伝えたいことを英文にできると楽しくて、どんどん英語が好きになっていった。それから、私は英語関連の仕事に興味をもつようになった。英語を学ぶことが楽しくて、それを仕事に生かせると思うと、心が躍った。でも、結局私は何も変わっていない。「英語を生かせる仕事がしたい」「そのために英語をもっと学びたい」そう口にすることはできなかった。

「歌手になる」という夢から逃げたときから、自分の中に、夢を語ること、やりたいことを口にする事への恐怖が巣食い、自分をどんどんむしばんでいった。

本当はわかっている。私の周りにいる人たちはみんな優しくて温かくて、自分のやりたいことをばかにしてくるような人たちではないことを。でも、恐れてしまう。「できるわけない」そう言われるのが怖くて、どうしても一歩踏み出せない。本気でやろうとしてできなかったときが怖い。そんな変なプライドまで自分の邪魔をしてくる。自分の中に広がった恐怖を振りほどくことができずに、いつの間にか本当の自分の気持ちを声に出せなくなっていた。

そんなとき、私はある言葉に出会った。

「理想唱えて何が悪い。夢唱えたっていいじゃねえか。現実が怖くて夢がみれるかあ。」

これは漫画『宮本から君へ』の登場キャラクター宮本浩の言葉だ。この言葉を知って、そのとおりだと、どこか腑に落ちた気がした。自分の理想くらい、夢くらい唱えていたい。現実には理想のとおりにはいかないかもしれない。しかし、そんなことは関係ない。理想を、夢を唱えることを恐れたくない。私たちにはまだ無限の可能性が広がっている。それなのに、夢を語ることさえ恐れて、目の前に広がる無数の可能性を自ら摘み取っている、そんな自分を変えたいと思った。恐れてばかりの自分はもう嫌だ、そう思った。この作文に自分の悩み、葛藤、そして、これからのことを綴るのはすごく勇気のいることだった。でも、もう恐れないと決めたから。自分の思いを声に、形にすること、夢や理想を語れることを。もう私の中に「歌手になりたい」という思いはない。明確な夢も見つかっていない。でも一つ確かな思いがある。自分の好きなこと、やりたいことを仕事にしたい。私が大人になったときに就いている職は、今では考えられないような仕事かもしれない。もしかしたら、好きなことや、やりたいことではないかもしれない。それでもいい。自分がやりたいことを、夢を、胸を張って語り、それに向かって努力した結果なら私は満足してどんな仕事でもしていると思う。

私の新しい夢。この作文が私を変える革命の第一歩。私の革命は今始まったばかりだ。